

## ドイツ留学の体験が小説に結実する

「一匹の人間が持っているだけの精力を一事に傾注すると、実際、不可能な事はなくなるかも知れない」

明治の文豪であり、陸軍軍医でもあった森鷗外の残した言葉だ。

言葉通り、鷗外は類まれなる集中力と瞬発力を持って、その名を後世に伝えた人物だった。

本名を森林太郎。代々津和野藩主（島根県）亀井家に仕える医師の家系で生まれた鷗外は、幼い頃から論語や孟子、オランダ語といった徹底したエリート教育を受けて育った。

周囲からの期待を一身に受けた彼も、またそれに応えるべく懸命に勉学に励み、十歳で私塾に入学。そこで医師にとって必須であるドイツ語を猛勉強することになる。

しかも、まだ十二歳だったにもかかわらず、二歳サバを読み第一大学区医学科予科に入学。十五歳になると、今でいう東京大学医学部である本科へと進学。絵に描いたようなエリート軍医としての道を歩み始めることになるのである。

本科を卒業し陸軍省に入省した鷗外が、東京陸軍病院に勤務するよう

になったのは十九歳の時。訪れたのがドイツ留学のチャンスだった。

当時、日本の医学はまだ発展途上にあつた。そのため、医療先進国であるドイツで医学を学び、それを日本に持ち帰ることは我が国の医療制度確立のためにも急務だった。

そこで、エリート中のエリートである鷗外に白羽の矢が立ったのだ。ドイツ留学を命じられた彼はライプチヒ、ドレスデン、ミュンヘン、ベルリンとドイツ国内で本場の医学を学ぶことになった。

とはいえ、大きな使命を受けてはいたものの、二十歳そこそこの青年

### 墓が語る

鷗外の転機はドイツへの医学留学だった。この地で鷗外は自分自身に新たな才能を見出す。日本には知る由も無い異国での体験は、鷗外の胸底に発酵しつつあつた創作への導線となつた。「文を書く」それは鷗外の思考の幅を広げた。そして生み出された名作の数々。

黄檗宗霊泉山禅林寺

## 森鷗外

禅林寺に改葬された森鷗外の墓石。



三鷹市にある禅林寺の正門。

である。ドイツでは友人と芸術鑑賞を楽しむ、パーティーに向向いたり、またドイツ人女性と恋愛するなど、青春を謳歌する日々が続いた。

ところが、これらの経験が鷗外の内秘めていた文学的才能を開花させるきっかけになるのである。

四年のドイツ留学を経て日本に帰国した彼は、ほどなくして『舞姫』や『うたかたの記』『文づかい』といった小説を発表。これらが鷗外代表作の一つとして有名なドイツ三部作である。

説明するまでもないが、小説『舞姫』のモデルとなつた

女性との恋愛はドイツでの経験がモチーフになったもの。『舞姫』の主人公太田豊太郎と恋仲になった女性、エリスのモデルは実在のエリーゼ・マリリー・カロリーネ・ヴィーゲルトという女性だった。かつて彼女の写真が発見され、ニュースにもなったこともあつた。

ところが、そのドイツ三部作をめぐって石橋忍月と論争を、また『しがらみ草紙』上で坪内逍遙の記実主義を批判して没理想論争を繰り広げたこともあつた。

かくして文学的活動の範囲を広げていった鷗外だったが、そんな中でも軍医部長として日清・日露戦争に出征。軍医として働きながら創作活動にも精励する鷗外は、明治四十二年（1909）に創刊された『スバル』に、『キタ・セクスアリス』『雁』などを発表。文豪と軍医という二つの顔を貫き通すことになる。

乃木希典の殉死で「死」がテーマとなる

大正元年（1912）。そんな鷗外の人生観に大きな影響を与える出来事が起こつた。友人、乃木希典の殉死である。

鷗外と乃木は陸軍時代に知り合い、

故郷が近かつたこともあつて意気投合した仲だった。親しい友でもあつた乃木が明治天皇崩御に殉じるといふ事件は鷗外の心に大きな衝撃を与えるとともに、に深い葛藤を残すことになっていく。

そんな鷗外の心情を綴つたのが、乃木の死後五日後に著した『興津弥五右衛門の遺書』という殉死をテーマにした短編だった。鷗外はその後も死をテーマにした歴史小説『阿部一族』や伝説を小説化した『山椒大夫』、江戸時代の随筆『流人の話』をもとに安楽死をテーマにした『高瀬舟』史伝『瀬江抽斎』などを執筆していく。もちろん、鷗外の筆を走らせた直接的な要因は、乃木の殉死を肯定したいという思いにあつたことは間違いない。

だが、時代は移り変わろうとしていた。天皇崩御に殉じることに対する世間の論調や芥川龍之介をはじめとする当時の若手小説家たちの声は、必ずしも鷗外の気持ちとは同質ではなかつた。乃木の殉死や、その後の鷗外の考え方が、好意的に受け止められることはなかつたのだ。

そんな背景もあつて、以前にもまして作品中で日本人の「意地」を描くようになった鷗外。それは、ある

意味、時代に対する逆行にも思えるものだった。

晩年にはさらにその傾向が強くなり、人間としての在り方をぎりぎりのところで支える普遍的な感情、彼はそれを「意地」として描き続けた。とはいえ、鷗外はなぜ、そこまでして「意地」を描かなければならなかつたのか。

きっかけはもちろん、乃木の殉死であつたろう。だが、彼の気持ちの根底にあるもの、それは日本人としての「誇り」だった。

若くしてドイツに留学した彼は、異文化に触れる中で、より日本人としての誇りを強く意識するようになっていった。

その証拠が、ドイツ留学時に、ナウマン博士が日本人を侮蔑するような発言をしたことに鷗外が激昂し、新聞紙上で公開論争を挑んだことではなかつたか。

そこには日本を離れたからこそ日々実感した、日本人としての誇りがあつた。そう思う。

だからこそ、欧米からは必要なものは取り入れるが、だからといって欧米に迎合することはしない、という鷗外独特のスタンスを確立していったように思えてならない。

### 真の敵を知つてるか！

さては僕に仇なす  
彼奴か？

### いや、敵は囊中に棲む

なに、それは誰じゃ！  
山の神よ！！

おお、山の神か  
林太郎、苦勞じゃの！



もりおうがい ● 文久2年1月19日（1862年2月17日）津和野藩で代々藩医を務めた森家の嫡男として出生。本名林太郎。19歳で第一大学区医学科（現・東京大学医学部）本科を卒業し陸軍軍医副に任官。明治17年（1884年）から陸軍省派遣留学生としてドイツで4年間過ごす。帰国後は軍医と作家の二足の草鞋を精力的にこなす。軍医部長、陸軍軍医総監（中将格）、陸軍省医務局長（軍医トップ）に就任。退役後は、帝室博物館（現・東京国立博物館）総長兼図書頭、帝国美術院（現・日本芸術院）初代総長などに就く。代表作は『舞姫』『キタ・セクスアリス』『雁』『山椒大夫』ほか。大正11年（1922年）7月9日死去。満60歳。

の地、向島の弘福寺とした。それも翌年の関東大震災によって、墓は東京都三鷹市の禅林寺と出生地津和野町の永明寺に改葬される。

軍医として最高の地位である軍医総監を勤め、ほかにも帝室博物館館長などの役職、名誉職を歴任。作家、評論家、歌人としてもその名をほしいままにした鷗外。

彼はこんな言葉を残している。  
（日の光を借りて照る大いなる月たらんよりは、自ら光を放つ小さき燈火たれ）

日の光を借りて照る月よりも、自ら光を放つ燈火……鷗外は鷗外ではなく、父母より賜つた名、森林太郎として生涯を終えた。その心底は、鷗外の「意地」であり、「誇り」であつたらうか。